特集

創造都市横浜

《2》〈座談会〉横浜の創造都市の新たな展開にむけて

【司会】 本日は、横浜の創造都市の新たな展開について、海外も含め各地の状況をお聞きしながら考えてみたい、ということで、佐々木先生には新しい創造都市の動向など、秋元館長には直島や金沢21世紀美術館の取り組みなどをご紹介いただきながら、意見交換いただければと思っております。

1 創造都市の最新状況

❶活発化する韓国の動き

【佐々木】 5月の1ヵ月間韓国に滞在し調査研究をしてきましたが、韓国でも各都市が創造都市を政策目標に掲げ、大変活発に取り組んでいます。たとえばソウルでは、2010年に開催する「デザイン都市ソウル」イベントに向けた「クリエイティブ・ガバナンス」というシンポジウムが、光州（クワンジュ）では、韓国政府・文化観光省が2023年を目標に進めている20年計画の文化都市プロジェクトの記念シンポジウムが開催されました。それから、金沢市の姉妹都市全州（チョンジュ）は、ビビンバ発祥の地ですから食文化の分野でユネスコの創造都市ネットワークへの申請を目指しています。他にも慶州（キョンジュ）、大田（テジョン）が申請しようとしています。

❷「沸騰型」ロンドンと「スローライフ型」ボローニャ

【佐々木】 ロンドンはこの10年ぐらい「クリエイティブ・ロンドン」というコンセプトを掲げずっと都市再生に力を入れてきましたが、最近、金融センターとしてのニューヨークの地位を抜いたのです。世界中からクリエイティブな人が集まり、同時にマネーも集まるということなのですね。同じこの10年でアメリカは、特に9・11（注1）の後、非常に内向きになって、クリエイティブな人が逃げていってしまっている。

最近わたしは、ロンドンのような沸騰型の創造都市と、ボローニャ（注2）のようなスローライフ型の創造都市、世界的に見ると大体この2つのタイプがあるだろうと考えるようになりました。金沢とか全州（チョンジュ）とかはボローニャと同じスローライフ型でしょう。

【秋元】 そうですね。マイペース型というか。

【佐々木】 大都市の場合、どうしても都市間競争の中でクリエイティビティを競い合う傾向にあります。ソウルは、明らかにアジアのグローバル・クリエイティブシティという方向を目指していますが、「グローバル」より「クリエイティブ」に力点を置いたほうが良いのではないかという話をシンポジウムでしてきました。今、ニューヨークの金融業界で大変なリストラが行われていますが、そのような大きな変動はクリエイティビティを殺すというか、クリエイティブな人材がその都市から離れていってしまうので、そういう変動の波に飲まれないほうがいい。ロンドンでも実際、地価が上がってきていて、アーティストにとっては住みづらくなっています。

2 創造都市を進める仕組み

❶「創造都市横浜推進協議会」と「アーツコミッション」

【川口】 最近、民間主体で創造都市を進める組織「創造都市横浜推進協議会」をたちあげました。その中で企業のネットワークをつくって、それを中心に、創造都市の事業を進めていこうということで、全国的な会社から地元の会社まで入ってもらって、企業の力をどのように発揮できるか、勉強を始めています。

それから「アーツコミッション」といって、アーティ

プロフィール

佐々木　雅幸

大阪市立大学大学院創造都市研究科教授。金沢大学経済学部教授、イタリアのボローニャ大学客員教授等を経て現職。2003年に日本都市学会賞を受賞した「創造都市への挑戦」（岩波書店）など関連著書多数。

（注1）2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ。4機の旅客機がほぼ同時に乗っ取られ、うち2機はニューヨークの世界貿易センタービルへ、1機は米国防総省へ突入し、残る1機は墜落した。アメリカ国民のみならず全世界に衝撃をあたえ、その後のアメリカ政治及び国際社会に大きな影響を与えた。

ストとか市民のアートに関するよろず相談窓口を去年からスタートして、結構いろいろな相談を受けています。またアーティストへの助成なども、アーツコミッションにアウトソーシングを始めています。

政策の中で「クリエイティブシティ」への行政のかかわり方を、少しずつ変えていく必要があるのではないかと思っています。

❷行政とアートコミュニティ（政策と現場）をつなぐ中間支援組織の必要性

【佐々木】 やはり行政だけで、アートコミュニティとつき合うのはとても難しい。やわらかい取り組みは必要で、中間支援団体のようなものが間に入るやり方がいいと思っています。

ヨーロッパの場合はもともと「アーツカウンシル」（注3）というのがあって、それがイギリスの場合は分権的にずっと展開してきたので、行政が、「アームズレングスの原則」（注4）に従って行政から自立した芸術支援機構を前提に、クリエイティブシティ政策が展開できる。これが日本とちょっと違うところかと思いますね。

ヨーロッパでも、歴史的にかなり厚みをもった文化遺産があるイタリアでは、地方銀行に地方の文化支援を義務付ける法律があり、財団を持っています。ですから、かなり系統的に文化財保護やオペラの支援などに財団からお金が入ってきて、仮に市の予算が伸びなくても、トータルで見たら相当な額が充当されるので維持できているわけです。

こういう点を韓国は比較的よく勉強していて、ソウル市内で有名な大学路（テハンノ）というところに「アーツカウンシル・コリア Arts Council Korea: Arko（アルコ）」があり、そこが運営するシアターやアートセンターがある。そういうものが核になって小劇場が100近く集まってくる。アルコは文化芸術振興法によって1973年に設立された韓国文化芸術振興院が前身で、2005年に改組されて予算も増え、いわばアームズレングスに則って事業を行っているのです。

日本では芸術文化振興会のもとに芸術文化振興基金という組織がありますが、政策的にちょっと韓国に負けてきている。今ソウルで新しいオフィスビルの1階から2階ぐらいの吹き抜けのスペースは、ほとんどパブリックアートの作品が展示されていて、行政も経済界も、入り過ぎかなというぐらい文化に力が入っているという迫力を感じました。

日本の文化政策は何とか自治体レベルで広がりを持ってきたけれども、ヨーロッパや韓国の熱気に比べるとまだまだで、もう少し何とかしたい。

自治体行政だけじゃなくて、もともとの文化支援のシステムと、民間が協力するシステムがそろってこないと、安定的に創造都市が前進していかないので、そのあたりは横浜が先を見て布石を打てると思うのですが。

【川口】 横浜は全国規模の企業から地元企業まで、いろいろと組み合わせていかないと一つの形になっていかないという難しさがあります。そこでどうしても行政が一歩先に行きたがってしまうけれども、それでずっと続いていくかというと、そうもいかないというジレンマは常にあります。

アーツコミッションは、今、芸術文化振興財団に運営をお願いしていますが、財団が施設管理だけでなく、アーツカウンシル型の、政策というものを行政と一体となって打ち出せるような仕組みに、まだ日本はなってきていないですね。

❷政策と現場をつなぐマネジメントシステムの必要性

【秋元】 直島と金沢でやっていて、文化的な政策から実行までいく間で、政策論議は結構ある程度高度なところまでいくのです。一方現場は現場でそれぞれの専門家がいて動かしていくわけですが、この間がなかなかうまくつながらない。多分、もう少し間をうまく結びつけるような組織がないと難しいのだろうと思います。

マネジメントそのものをクリエイティブにしていくような要素を持っていかないと、難しくなってきているのかなと思うんですよね。

【川口】 横浜市もバンカートとか、横浜アートプラットフォームとか、幾つか中間支援型NPOがありますが、NPOには自分たちの目標があるので、支援の方向がそのNPOの性格で決まってしまいます。その間に、ある程度の団体でやっていくものがないと、全体を見るのは難しいかなと思っています。

財団も今までは、建物の管理が中心だったので、今後

秋元　雄史

金沢21世紀美術館館長。1991年から2004年6月まで㈱ベネッセコーポレーションに勤務。ベネッセが瀬戸内海の直島で展開する「ベネッセアートサイト直島」の企画・運営に携わり、2004年直島に開館した地中美術館館長を経て現職。

（注2）
アメリカの都市研究者J・ジェイコブズが「創造都市」として注目した中部イタリアの都市。職人企業（特定分野に限定した中小企業群）のフレキシブルなネットワーク型経済を特徴とする。欧州一古い大学のある学芸都市で、エミリア・ロマーニャ州の州都。

（注3）
芸術評議会。1946年イギリスで創設され、初代総裁は経済学者ケインズ。芸術文化を支援する専門家集団の公的機関で、助成金の支給などの経済的援助から芸術教育、経営、企業とのパートナーシップなど、芸術活動の活発な実現のための支援を行う。

（注4）
文化行政において芸術と行政が一定の距離を保ち、援助を受けながら、しかも表現の自由と独立性を維持する、という法則。

アーツカウンシルのような役割も担い、かつ、中間支援のNPOを育成していく、そういうような形が求められていくのではないでしょうか。

【佐々木】 まさにそうですね。創造都市という、ある意味での社会実験を金沢では2000年ぐらいから始めていて、旧来の行政システムの弱い部分が見えてきている。マネジメントのシステムがなかなか成熟しないでいますが、半面そこが創造都市実現の一つのカギになるだろうということも理解されつつあります。事業型のNPOはそれぞれ自分のミッションを持ってやっていますから、都市レベル全体や幾つかのジャンルを横断的に見るという余裕はない。アメリカの場合は中間支援型のNPOが非常によくできているのですが、創造都市の次のステップを考えるとき、そういうものとアーツカウンシル的な行政の分野、この両方を次の課題として意識していくところへきているのではないでしょうか。

【川口】 ちょっと話題が変わるかもしれませんが、アーティストと、産業でも何でも、マッチングの問題があって、人か、組織かわかりませんが、コーディネート役のようなものがかなり力をつけてこないと、うまく回っていかないのではないかと思うときがあります。その辺はどうですか。

【秋元】 そうだと思いますね。役者ばかりそろっても舞台は回らないわけですから。そのあたりがどれぐらいいるかで変わってくると思います。

3 アートはまちにどうかかわるのか

❶創造都市の産業・社会への広がり

【佐々木】 横浜は特に産業化の問題も苦労されているようですね。ロンドンではアートを媒介にして、クリエイティブインダストリー（注5）の活性化に成功していて、特に音楽産業で外貨を稼ぎ、雇用も拡大しています。一方で、ホームレスの自立を支援するような取り組みがあり、そういう社会包摂的な施策も創造都市の大きなフレームに入ってきている。特にマイノリティの人たちを社会の中心に持ってくるというアートの役割とともに、非常に広い社会的視野を持っているアーティストのあり方が理解されてきた。そのあたりをこれから日本でどう進めるのかが、もうひとつの課題ではないでしょうか。

【川口】 産業化ということについては、経済原理の中で回らなくてはいけないものがある。その壁をきちっと突き破らないと循環としていかないと思うので、それはやはり時間のかかることだと思うのです。企業のネットワークをつくることによって、その中から何かネタを探していって、小さくてもいいから、一つの経済活動につながっていく。そういうようなことが必要かと思っています。

それから、企業に対する補助金をつくりました。企業に助成するのは初めてで、議論もありましたが、ともかくやってみようとはじめました。何か製品をつくるとか、物事を研究するときに、市内のアーティストを使ってくれたら、そこにかかる金は助成する、という制度です。

こういうことが話題になって、その製品が市場に出ていくとか、きっかけになるといと思っています。あんまり大きな循環だと、有名な人に仕事がいってしまうので、アーティストが参加しやすい、小さな循環を幾つもつくり出していこうとしています。

【秋元】 ささやかな仕事でも、そういう小さい施策が大切ですよね。丁寧に埋めていかないと、回るものも回らなくなってしまうところがあると思います。

❷黄金町バザール

【川口】 アーティストの力をどう使うかということで、「黄金町バザール」（注6）というのを企画しています。これは、違法な飲食店を締め出し、空いた250ぐらいの店舗をどういう形で使ってまちづくりしていこうか、というところです。賃料が安いからそこで何かやるというのは、アーティストぐらいしかいなくて、それでスタートして、アートでまちを変えていこうという形になっていったわけです。経済の循環が成り立たないようなところに力を発揮できるのは、やはりアートなのかなと思っています。

【佐々木】 これは公設型ですよね。

【川口】 ええ。現代アートというのは、行政側がある程度金をつぎ込まないと支えられないところがあるので、手放しな循環が始まっているわけではないのですが、少し辛抱すると、まちづくりにアートが本格的にかかわっていける

川口 良一
開港150周年・創造都市事業本部長

（注5）
イギリスのブレア政権が提唱したもので、音楽、舞台芸術、映像、ファッション、デザイン、工芸、建築、広告、テレビ・ラジオ、出版、ゲームソフトを含むソフトウェアなどの産業をさす。その成長可能性に注目し、振興策が行われている。

（注6）
黄金町バザールについては「《3》②『創造界隈』の形成はヨコハマを変えたか」「《8》創造都市の新たな展開」参照

のではないかと思っています。

小さい循環と、政策的なアートの使い方というか、アーティストとのかかわり、この二つが大事な要素かなと思っています。

【佐々木】 そういうところをあえてターゲットに置かれたのは、何か政策的な意図があるのでしょうか。

【川口】 アートでまちづくりができるか、というのが大きな我々としての命題だと思うのです。既成市街地の中で創造都市の拠点をつくって、緩やかだけど、少しずつまちも変わり出していくというようなところはあるわけですが、ここは強制的に空間をつくったわけで、その空白を本当にアートで埋めることができれば、その力を証明することになる。こういうことに挑戦しないと、創造都市がまちづくりなんだということは見えてこない、こういうことが、文化芸術によるまちづくりの実践につながるのではないかと思って始めたのです。

❸金沢の取組―現場と理念を結ぶプロセス

【佐々木】 金沢に、JR金沢駅から21世紀美術館に至る商店街をアートストリートに、というような構想があったと思いますが、かなり変わりましたか。

【秋元】 彫刻を置いてまちづくりをしていく手法は、今の時代にはあんまり合わない。ものをつくっていくプロセスみたいなものを、周辺の人や団体、青年会議所や、商店街とやりとりしていく、というやり方で、「プラットフォーム」という展覧会をやろうとしています。

どうしても、具体的な「こういう事業をやりたい」、という話になるのですが、特に今の若手とは、金沢のまちをどうするのがいいのか、クリエイティブシティのような概念も含めて、現場と理念を行ったり来たりできるような余裕を持ちましょう、そういうふうにやっていく。その中で、ある志を共有できるような緩やかなネットワークみたいなものができてくると、次にぽんとやっても、「ああそうか」と思えるかなと。道のりは長いのですが。

【佐々木】 金沢は、金沢市民芸術村（注7）とか21世紀美術館という、拠点が明確にできた。次の段階は、まさにコミュニティとか、都市の社会関係の中にアートが入ってくるという、その関係性のところだと思います。

4 アーティストの流動化とまちの多様性

❶金沢の伝統工芸と現代アート

【佐々木】 金沢の場合だと、伝統工芸の世界が現代アートの刺激を受けて変わるプロセスというか、その辺はどう考えておられますか。

【秋元】 まちの中を見てみると、文化格差というか、伝統的なものの中で暮らしている人たちは、苦しいと言っても暮らせている。ところが、美大を卒業して、今の流れの中に入りたくない人たちが、周辺にあふれている。

今、美大を出ているような人とか、若い人たちで文化ニートみたいな人たちは、結局、東京へ来てしまっています。一方伝統文化もだんだん年齢層が上がってきて、力が弱ってきている。そこが割と激しくやりとりし始めると、意外とブレークスルー（突破）する瞬間が見えてくるのかなと思うんですね。何か刺激して外から変えていくようなことをしないと、長い目で見たときの次の展開がないのかなと思います。

【佐々木】 金沢には美術工芸大学があり、すぐれた学生が多くいます。まさに宝の山があるわけで、その人たちにもっと光を当てていくというのは、新しい金沢モデルですね。

❷多様さを許容する懐の深さ

【秋元】 まちに、いろいろな人たちが自由に動けるような状況を許容できる、一種の懐の深さがないといけないと思うのですが、どうしてもいろんな仕組みそのものが排除していくようになっている。そこで、どれだけ多様なものが共存できる状況をつくっていくかが、すごく重要だと思っています。

横浜という360万都市で、高層ビルと、黄金町みたいなスケールのものと、極端に見えるぐらいの違うものが一つの場にあることが大切なんだと思います。

【川口】 寿（注8）というところで活動している人たちがホステルをやっていて、1泊3000円で泊まれます。それで、半分以上が外国人のお客さんなのです。こういうものを活用しながら、いろんなことをやっていくのが、今言われた多様性を生み出すもとかなと思うんですけどね。

【佐々木】 そうですね。きらびやかな現代アートの先端と

（注7）
旧紡績工場の産業遺産であるレンガ造り倉庫の空間を活用し、演劇、音楽、美術などの創作活動や発表の場として平成8年に開設された。24時間年中無休で使えるなど創作の自由を保障する一方、利用市民も管理責任を果たすという市民運営システムが高く評価されている。

（注8）
寿町については「〈7〉③生態系としてのまちづくり―寿町の取り組み―」参照

いうものだけじゃなくて、そういうところにアーティストがどうやって関係性を見出していくか。また、そういうことを行政が支援して懐の深いところを見せていくことこそ、実に発信力があると思っているのです。むしろマイナスのような話を引っ張り出してきて、新しいアプローチをする。それが本当はとてもリアルな話なのです。市民にとってもね。

❸アーティストの流動性と創造都市のネットワーク

【川口】 横浜市は結構大きいので、市の中でも、創造都市の活動がまだ行き届いていないのではないかと言われるのですが、金沢は金沢の中で固有にやっていくのか、それとも、周りとの交流はあり得るのでしょうか。

【秋元】 一つは、アーティストそのものが、例えば、日比野（注9）さんのように、ちょうどハチが花粉を運ぶようにいろんな都市を結びつけていく、あるいはあるキュレーターが移動していって、都市を結びつけていくようなところもありますね。

今思っているのは、今まで金沢を支えていたものは、土地のある種の気候風土とか、伝統的な歴史的な積み重ねの中で生まれて、土地に根差すものが多かったわけですね。これ自体は非常に重要だし、ある種アイデンティティとつながっているのですが、これだけだと、やはり次に展開しないんですよね。ある部分でもう少し移動する、融合型のカルチャーをぶつけていかないといけない。こっちをつくっていかないとだめかなと思っていて、移動していくものと、その場で場所を耕していくような文化とが、ぶつかり混ざっていくような感じなのかなと。

だから、これからの地方都市、特に金沢ぐらいの規模だと、45万人だから、周辺の福井とか北陸3県ぐらいまでを商圏にするぐらいの吸引力がある、頭一つ、二つぐらい抜け出たような文化政策みたいなものをやろうと思うと、ある部分で拠点をほかにも持っていて、ネットワークしていくようなことが必要になってきているとは思うんですね。

【川口】 金沢・新潟・横浜で、フランスの6都市と交流をやっていますが、アーティストの場を広げることは、大きな目的の一つだと思うのです。国内とか海外とネットワークを組む、ということが、全体としてのアーティストの流動性を呼んでくるのではないかと思っているのですけれどね。

【秋元】 日本よりも、今、韓国のキュレーターたちとか、アートマネジメントをやっているような人達のほうが、ある種グローバルな視点で東アジア的な文化圏をイメージしていて、かなり動いていますね。アーティストはもう中国ぐらいまで、かなり移動しています。個人的な移動をもう少しある仕組みにうまく落としていければ、大分動き始めるのかなとは思うのですけどね。

【佐々木】 そのとおりだと思います。そういう既に起こっているものを、もう少し広げてつないでいくことが必要で、創造都市というものは一つの都市で完結しないので、ネットワークを組んでいくことが大切です。今、韓国の動きと連動すると、東アジアのレベルで創造都市のネットワークがもっとダイナミックに動くのではないかと思うんですね。

❹「アジア的価値」を発信する―日本の創造都市の特徴とは？

【佐々木】 アジアの創造都市ネットワークを広げていくという場合、「アジア的価値」をきちんとプレゼンテーションできないと弱いと思うのです。それは何か。芸術表現であるのか、あるいは今の環境問題との関係なのか、そのあたりが我々の次のテーマかと思っています。

例えば京都の場合は、京都議定書（注10）というのが京都の新しいシンボルなので、新しいグローバルな時代の環境首都、のような形で打ち出す。金沢は西田哲学以来の流れで、日本の伝統に即した新しい価値観をつくることが得意です。今、日本やアジアから発信するべきテーマを現代アートと結びつけて展開できるだろうと思うのですが、芸術系大学が増えてきて、スキルを身につけた人材は出てくるけれど、さらにミッションや哲学をもって発信できる学生は、なかなかいませんね。

だから、それぞれの創造都市の担い手をつくる場合に、そこの新しい価値観と表現とを結びつけられるような人材養成を、難しいけれどやっていかなくてはいけない。

国際的な会議に出て「日本の創造都市の特徴は何か」「結局、何が世界に貢献できるのか」と聞かれたときに、どう答えられるか。これは横浜で

（注9）
日比野 克彦。
国内外で個展・グループ展を多数開催する他、舞台美術、パブリックアートなど、多岐にわたり活動する日本を代表するアーティスト。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを多く行っている。現在横浜でも開港150周年記念事業アートプロデューサーとして、市民と段ボールで横浜ゆかりの船をつくる「横浜FUNEプロジェクト」、実際に乗ることができる段ボール船造りプロジェクト「THE SEEDS TRIP」を行っている。

（注10）
平成9年に、温室効果ガス排出規制に関する国際会議「地球温暖化防止会議」が京都で開催され、先進国の排出削減について法的拘束力のある数値目標などを定めた「京都議定書」が採択された。

も金沢でも大きいテーマだと思うのです。

❺コミュニティアートの可能性

【秋元】 これは多分アジア的なある種の特徴だと思うのですが、直島でも金沢でも、土地に根差した、代々続いてきた地域型のコミュニティがありますよね。こういうものが崩れたと言っても、まだかろうじて残っているわけです。一方でNPOなど、もう少し目的的なある種の個人主義を背景としたコミュニティがあります。これをどうなじませるかというか、新しい形につくりかえていくか。アジア的な地域社会、これからの未来に向かって何か下支えしていくような人間関係や社会、このあたりをどうつくっていくかが、ミクロで地域を見ていったときには、割と重要な問題になっていくのではないかと思うのです。

アーティストが、もしかするとできるかもしれないのは、例えば、非常に高齢のおばあちゃんと若い人たちが一緒になって何かがやれるような関係とか、地域社会のモデルみたいなものをつくり出すというのは、私はコミュニティアート（注11）を考えていくときの、いつも一つの願いにしているのです。

【川口】 横浜でも既成市街地の中にはそういう町内会組織があって、そこにアートがかかわるのは、難しさはやはりあります。

【秋元】 横浜は本当に大都市なので、人間関係の質が大分違うと思うのです。金沢もかなり古いものが残っているし、直島へ行くと、もう完全にそれしかない。ただ、支えている人たちが、古いコミュニティの、もう70代よりも上の方たちで、そういう人たちがまだ包括的にヒエラルキーをつくって、実際に動かしている。でも、ある種の不安というのは持っていて、何かしなければいけないと思っている。そういうところに少しずつ顔を出しつつ、大変でも何かやりとりしていかないと、本当の意味での次の展開ができないのかなと思っています。

❻クリティカルマス ―「臨界質量」（注12）

【川口】 横浜でも例えば、東京から来て、バンカートで展覧会をやったアーティストと、地方の美術協会との摩擦とか、そういうのは確かにあるんですよ。

【秋元】 背景に、その方たちが生きている業界があり、実社会があって、そういう生きている社会のぶつかり合いでもあるし、価値観のぶつかり合いでもあるんですね。

【佐々木】 京都や金沢のいわゆる伝統文化の世界にある価値観というのは、非常に強いと思いますね。僕は学生時代を京都で過ごしましたが、そのとき大きな社会変動があって、新しいアーティストのグループが社会の中心でクリエイティビティを発揮し、社会に影響を与えました。調べてみるとボローニャでも、ある種文化革命みたいなものの起きたときがあるんですよ。

そういうプロセスというものを、今、金沢が意識しているかどうかわからないですけれど、21世紀美術館をコンテンポラリーアートでいくというふうに決めたときというのは・・・

【秋元】 そうですね、それでもう一歩踏み出したのですね。

【佐々木】 そのやや前段に芸術村があったのでしょうけれども、こういうものが積み重なっていったときに、核融合が起きて臨界質量を超えるんですよね。

ランドリーと話していると、いつもこの「クリティカルマス（臨界質量）」がどうだという議論をするのですが、それを準備していけるかどうか、そのあたりをにらみながら、いろいろなところに仕掛けをする展開役のような人の存在が大事ですね。

【川口】 それはやはり、さっき言ったような流動化と、多様性、その二つが大事ですよね。あとは、アーティストの強さみたいなものも必ず要るのかなと思います。

【秋元】 プロフェッショナリズムというか、何が一番のコアとなる価値なのかというような、価値観論争というか、ある種原理主義的な部分を見ようとしていかないとまずいですよね。

【佐々木】 そのとおりです。

5 ―創造都市の多様性

❶横浜と金沢―クリエイティブキャピタル型とソーシャルキャピタル型

【佐々木】 世界的なモデルでいくと、金沢とかボローニャというのは、市民レベルの活動的な人たちは、みんな割と親しいネットワークがあって、その信頼関係で社会が動いている。よく社会関係資本、「ソーシャルキャピタル」と言いますよね。

（注11）
コミュニティにかかわるアート。作品の共同制作を通じて、コミュニティの構成メンバーの親睦をはかるものから、コミュニティにおける課題の共有化や解決を狙う社会性の高いものまで、さまざまな試みが行われている。

（注12）
もとは物理学の用語で、核分裂の連鎖反応を引き起こすのに最小限必要な、核分裂性物質の質量のこと。ある現象が急激に進むために必要となる量、というような意味で使われている。

ところが、横浜もそうですが、ロンドンとかニューヨークではそういうものは比較的希薄です。フロリダはむしろ「クリエイティブキャピタル（創造資本）」（注13）と言っていて、お互いの持っている創造的なネットワーク、文化的な関係性、それらが多様に存在して、それを認め合う、その違いがあると思うんです。

だから、ロンドンが沸騰型でボローニャがスローライフ型だとすると、別の意味で、クリエイティブキャピタル型とソーシャルキャピタル型、というような対比ができるかもしれない。

結局、創造都市はみんな多様ですから、何か一つのモデルがあって「こうならなきゃいけない」というのではなく、それぞれのよさがあり、それぞれの場所でアーティスト自身がまた成長するということもある。

【川口】 それは、やはり創造都市も多様性があるということですかね。

【佐々木】 そうです。だからおもしろいのです。

6 創造都市の評価軸

❶感覚の数値化、生活の質、まちの魅力・わくわく感

【佐々木】 何が変わったのと聞かれたときに、その評価軸をどう見ていくかが、これから大きいですよね。

【川口】 そこの人間が、「ああ、やっぱり変わったな」と実感する感覚が一番大事だと思うのですが、数値化が難しい。どういうことが変わったと言えるのか、どこまでいったら創造都市が形成できたと言えるのか、そういう到達点みたいなところがうまく示せない課題の一つです。

【佐々木】 結局、生活の質だと思います。トータルでその都市の市民の生活の質が改善したかどうかということが、これからの評価に求められるんでしょうね。

僕は金沢で、21世紀美術館がオープンして1年間の経済効果を測定したり、アンサンブル金沢と音楽堂の経済効果を測定しました。けれども市民にとってこれはそんなに必要ではなくて、具体的にどう生活がよくなったとか、子どもたちにとってまちが魅力的になっているとか、もっとわくわくするようなことが起きているというようなことなのかもしれません。

【川口】 わくわく感というのはすごく大事だと思います。まちに住む、まちを歩くということで、わくわくするとか、高揚感があるとか、そういうまちにしていくのが、市民の満足度につながっていくと思うんですよね。

❷世界的な価値の中で考える

【佐々木】 イタリアの企業のモットーは、人々の生活をわくわくさせることにある、と言うんですよね。日本の企業は、なかなかそうは言わない。ところが、金沢の企業というのは多分、イタリアの企業に近い感覚をもっているのでしょうね。

【秋元】 そうですね。企業活動の中に、数字でなかなか表現できない、あるクオリティのようなものが必要だ、と思っていますよね。

【佐々木】 つまり、規模ではもう勝負できないから質で、そしてその質を理解してもらうために、金沢の文化を基盤にして同じ土俵に立ってもらう。そのときの金沢の文化というのは、古いままなのか、新しくなっているのか。あるいはアジアや世界レベルで見たとき価値があるのかといったことを追求していく必要があるでしょうね。

横浜もそうですが、アジアの中で創造都市のネットワークとかダイナミズムを形成しようと思った場合、そういう視点も要りますよね。

【川口】 そうですね。

❸横浜の新しいイメージ―若々しいまち

【秋元】 横浜市が、トリエンナーレとかバンカートとか、現代アートをある意味クローズアップしたことが、もう大分定着してきたじゃないですか。横浜をイメージするときに、「若々しいまち」とか、今まで形容できなかったものが、あるイメージを持つようになるわけですよね。そういうまちの非常に緩やかなイメージやアイデンティティが、意外といろんなものに影響していると思うんですよね。こんなまちなんだ、と思えるというのは、非常に強いと思います。

【川口】 確かに横浜というと、港とか開港とか、それが一つのステレオタイプで入ってくる。そうではないイメージができてくるというのは、結構大きな要素だと思います。

【秋元】 人格に近いような、都市格みたいなものができ上がってきている、関東は非常に巨大な都市エリアなので、その中で、横浜市というイメージをつくり上げるのは、

（注13）
アメリカの都市経済学者リチャード・フロリダが『The Rise of The Creative Class』（2002年）の中で考察した新しい階層。クリエイティブ・クラスとは、新しいアイデアや技術、コンテンツの創造によって、経済を成長させる機能を担う人々で、その活動にふさわしい土地を選んで国境や都市を超えて移動していくなど、流動性が高いといわれている。

大切なことだろうと思うのです。

【佐々木】 その点では、この4、5年の成果として明快に都市のビジョンというか、ブランド的には成功したかもしれませんね。

【秋元】 横浜はこのサイズの中でよくいろいろな施策がぶれずにやられていると思いますし、一個一個の施策がおもしろい。ある時期、みんな、横浜には随分勉強しに来ているのではないですか。

❹横浜のスケール感、横浜のアイデンティティ

【川口】 東京とも金沢とも、直島とも違う、横浜というもののスケール感を、どういうふうにとらえてやっていくのか、ということが非常に大事だと思っています。

【秋元】 どんなに大きくても、人間のある営みのようなもののリアリティをどううまくつかまえられるか、というところは、ポイントだと思うんです。でないと、文化をやりながら、すごく冷たい施策になってしまう。

【佐々木】 もう一つは、都市の中で、特別の力、あるいは、特別の記憶のある場所がありますね。金沢の場合だと、芸術村がそういう場所でした。そこに何か重要なプロジェクトとか力点を置くのは大事だと思っていて、そこを深く掘り下げると、いろいろな地層が見えてくる。金沢でいくと、伝統的価値観にくさびを打ち込むような形で見えてくる。

【川口】 横浜市の場合は、港を中心とした歴史的な建築物や倉庫は、市民の中では非常に記憶の中に残るものになっているし、共通のアイデンティティを持てるようなものだと思うのです。そういうものを使って展開していったのは、結構象徴的でもあるし、きっかけとしてはよかったのかなと思います。

今、横浜港の原点ともいうべき「象の鼻」（注14）というところを整備していますが、こういうところの活用にはこだわっていきたいと思っていますし、埠頭の倉庫を今後どのように活用していくか、常に生きている港との関係とは考えなければいけないけれども、そういうのを大事にしていこうというのはありますね。

【佐々木】 シンボル的に市民が理解し得るということが大事だと思います。

【司会】 本日は、幅広い視点から重要なご意見をいただけたと思います。お忙しいところありがとうございました。

（注14）象の鼻地区の整備については「《3》①開港150周年に向けた都心臨海部の再生について」参照

Creative City Yokohama